

「できる。」「できた！」をみつける。

作業所 生活支援員 目標工賃達成支援員

《はじめに》

2020年4月より、げんきの家作業所への利用を開始される対象者Aさん。慣れない環境の変化と、新しい作業内容に戸惑う様子は日々感じられていた。明るい性格で、手先も器用なAさんだが、新しい作業への挑戦として『はし組み』を提供した際に感じられたことや、できるようになるまでに私たちが考え、取り組んできたことについてここで述べたいと思う。

『Aさんの概要』

- ・10代 男性
- ・知的障害
- ・ダウン症
- ・区分4

《はし組みとは》



下請け作業で行っているもので、はし組みは葬儀セットの一部。

- ・2膳使い、山を5個×2セットつくる。
 - ・1セット(山5個)互い違いに重ねる。
 - 両端に輪ゴムを2重にしてかける。
 - 箸の真ん中を半紙テープで固定する。
- ※商品としての完成は●までだが、この中での「はし組み」は●までが完成品となる。

《はし組みの様子》

作業開始

Aさんに、完成品を提示し作業内容の工程を順追って説明する。作業内容については、しっかりと把握している様子。はしを提供し様子を見ることした。

【Aさんの『できる。』】

- ①数唱はできる(1～50まで)。
(物を数えることはできない。)
- ②右山で組み(2膳1セット)、組んだ箸を合わせていくことができる。
(数えることが難しい為、2膳1セット×5で終えることはできない。)
- ③右山なら組むことができる。
(左山で組むことはできない。)
- ④組んだはしを上下段に重ね合わせることができる。
(山の向きは上下段同じ向きでしか重ねることはできない。)
- ⑤上下段に重ねた後、キレイに揃え合わせることができる。
- ⑥輪ゴムを付けることができる。
(2重に付けることは、箸が崩れてしまう為できない。)

私の思い。

ここまでの段階で、Aさんが「できる。」ことは沢山あるが、実際にはし組みという作業の中では活かせていないことに気づく。「どうしたら、Aさんの『できる。』ことを十分に活かして、作業を行うことができるのだろう。『できた!』にするには、どのような工夫が必要なのだろう。」と思い、Aさんに合った箸組み用の自助具を作るという考えに至った。

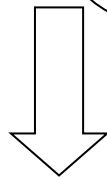
《最初の自助具》



- 箸の数と箸の向きを把握できるように、台紙に数(2膳1セットで**1**。これを**1~5**まで書く。)と箸の図形を記載。その際、左右の向きが分かるように山の先端を赤ペンで線引きした。
- 箸の上下段が分かるように、台紙に「上」「下」と記載。

《自助具の改善点》

- 数を記載しただけでは理解が難しいのか、**5**までで終わらず、組み続けてしまう。
- 図形を記載しても、左山では組むことが不可能。その為、上下段に重ねた際に、左右の山の向きが同じになってしまっている。



《上記のことをふまえ、自助具を改良してみた》



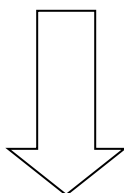
- 台紙を付けずに、箸を組む際の枠だけ作成。
- 上下段を別々に作成。
- 上下段どちらも右山で組めるように作成。

《「できる」が「できた!」になったこと》

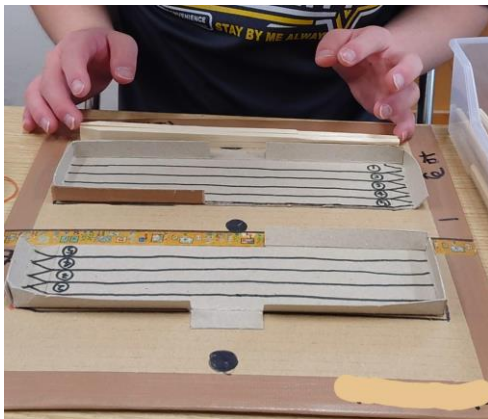
- 箸の数と向きを図形で記載し、枠を付けたことにより箸の数を把握することができるようになる。(Aさんの「できる。」①②→「できた!」)

《自助具の改善点》

- 上下段右山で組めてはいるが、重ねた際に山の向きが同じになってしまう。

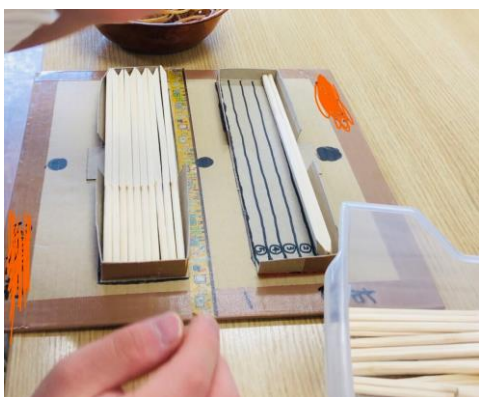


《改良を重ねた結果》



・最初の自助具の台紙に上記の枠組みを付けたものをAさんから見て、上下に固定。その際、上は右山。下は左山になるように固定する。

・取り付けられた枠組みの中央を5センチほど切り取る。枠がなくなった部分に大きな黒丸●を付ける。



《自助具の使用方法》

①Aさんから見て、上の段に箸を右山になるように組んでいく。

②上の段を組終えたら、台紙ごと180度回転させる。

③再びAさんから見て、上の段に箸を右山になるように組んでいく。

④上下どちらかの箸の黒丸●部分を掴み、残った方の箸の上に重ねる。

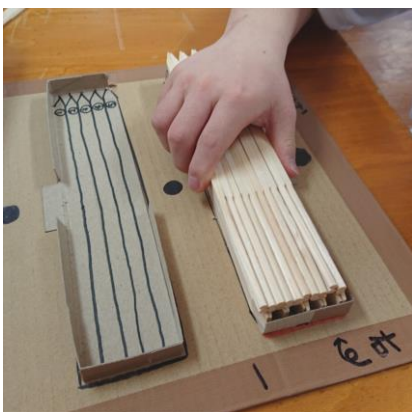
⑤上下段重なった箸を自助具から外し、箸の両端に輪ゴムを2重にかける。

《「できる。」から「できた！」になったこと》

・上下段どちらも右山で箸を組むが、台紙ごと回転させたことにより重ねた際には、上下段の山の向きを左右対称に重ねることができるようになった。(Aさんの「できる。」③④→「できた！」)

《次のステップとして・・・》

・輪ゴムを2重にしてかけることはできる。しかし、輪ゴムをかけるまでに組んだ箸が崩れてしまう。



《輪ゴムをかけられるようになるまで》

自助具が完成し、Aさん自身も自助具を用いて箸が組めるようになるが、最後の仕上げの「輪ゴムかけ」が難しく、最初の頃は箸が組み終えたら近くの職員や、なかまに声をかけてもらい輪ゴムのみをかけてもらっていた。しかし、崩れにくい物には輪ゴムを2重にかけることができていた為、自分で組んだ箸にもAさん自身で輪ゴムをかけることができないのか私たちは模索し、箸を組む為の自助具とは別に「輪ゴムをかける為の自助具」を考えたが、自助具を用いるとすでにできる輪ゴムかけの工程が増えてしまう為、Aさんにとって負担になるのでは？と思い断念する。また、せっかくできるようになった箸組みも、コロナ渦のため下請け業者からの在庫が入ってこず、一時中断をせざるを得なかった。

数ヵ月後、在庫が入荷し作業再開となる。1つのテーブルでAさんを含む数名の利用者が箸組みの作業を行う。Aさんは、周りの利用者が行う箸組みをしっかりと観察していたのか、輪ゴムかけの方法を真似し取得していた。



《その方法とは・・・》

- 一. 重ねた箸を両手でしっかり握り、台などの上でしっかりと揃え整える。
- 二. 手で輪ゴムを取り、左手で箸を自分の腹部に押し当てる。
- 三. そのまま右手で箸に輪ゴムをかけ、右手と腹部で箸を支える。
- 四. 左手で三. でかけた輪ゴムをひねり、2重にかける。
- 五. 一. に戻る。
- 六. もう片方の輪ゴムは、台上などで行う。
(二. 三. 四. と同じ方法)

(Aさんの「できる。」→五. 六. 「できた！」)

《輪ゴムかけでの気づき・・・》

作業に使用する輪ゴムには、(1)太さは細め。大きさは小さめ。硬さは軟らかめ。(2)太さは太め。大きさは小さめ。硬さは硬め。(3)太さは太め。大きさは大きめ。硬さは軟らかめ。の3種類がある。輪ゴムかけの練習を始めた頃は、(1)~(3)をランダムで使用していたが、何度も繰り返し練習していく中で、Aさん自身が使いやすい輪ゴムを見つけ出した。輪ゴムかけができるようになった今では、輪ゴムをランダムに提供しても①の輪ゴムを選択し、使用している。



[画像：右⇒Aさんが使用している輪ゴム

①輪ゴムの特徴より、2重にかけやすい]

[画像：左⇒他利用者が使用している輪ゴム

②輪ゴムの特徴より、2重にかけることができなくても組んだ箸は崩れにくい]

《ちょっと試しに・・・》

一通りの工程にて、箸組みに慣れた頃、自助具なしで箸組みに挑戦してみた。1つめの箸は自助具を用いて組むが、2つめの箸は完成品を見て組むようにする。すると、上記工程とは全く別の工程で箸を組み始めるAさん。上段2膳1組で山を作ったなら、下段も同じように組む。上段と下段を交互に数を合わせながら組んでいく。完成品と並べて、組んだ箸の数が同じならどちらか片方の箸を180度回転させ、上段と下段を重ね合わせ、上記工程にて輪ゴムをかける。

物は数えれず、数唱はできていたAさん。山の向きが左右対称になるように重ねなければならぬと理解はしているものの、実際に重ねることは困難だったAさんだが、今回の補助具を用いてしっかりと工程を身につけ補助具がなくてもできるようになった。自助具がないと、まだまだ時間もかかり、時折失敗もあるが、Aさんのペースに合わせて取り組んでいきたいと思う。



《今後の課題について》

「できる。」ことが、作業を通して「できた！」に変わり、Aさんの自信に繋がったように感じる。箸を組み終えた完成品を職員に「みて〜！」と笑顔で見せに来てくれる様子が多々見られている。

これから、まだまだ新しい作業に携わっていくが、Aさんの「できる。」をたくさん見つけ、作業の中で「できる。」をどう工夫したら、「できた！」に変えていくことができるのか、これからも追究し続けていきたいと思う。